

## 私と祖父を繋いだ朝食

足利女子高等学校一年 松本 凜

幼い頃から、両親が共働きであるため祖父母の家で過ごすことが多かった。祖父母の家は隣にあり、二人共とても優しくかった。その頃はすでに祖父母がいることが、毎日祖父母に会うことが当たり前になっていったのだ。

しかし、中学校に上がる頃祖母が亡くなった。中学生になった私は部活や勉強が忙しかった事もあり、祖父母の家にはあまり寄り付かなくなった。正直、学校生活が忙しかったこともあるが祖母のいない現実を受けとめられなかったのだと思う。進級する頃にはほとんど祖父母の家に行くことはなくなっていた。

そんな中でも、私は唯一祖父と毎日関わる機会がある。それは母の作った朝食のプレートを私が登校する前に祖父の家まで届けに行く時だ。祖母が亡くなってからは毎日届けるようになった。しかし朝の忙しい時間帯ということもあり私はそれさえ面倒だと感じるようになってしまった。高校に入り、登校時間が早まるとそれもやらなくなかった。私と祖父が会う機会はほとんどなくなってしまったのだ。すると、今度は頻繁に祖父から電話がかかるようになった。

「明日の祝日は何の日なんだい。」

「野菜がたくさん届いたから届けるよ。」

内容は特にない世間話がほとんどだった。家にいる時も友達と遊ん

でいる時も、かかってくる祖父からの電話に私は正直鬱陶しさを感じていた。祖父がどんな思いで電話していたのかも私は知らなかった。

ある日、私は家で母と二人きりになる機会があり、思い切って話してみることにした。祖父が最近、頻繁に電話をかけてくるんだと。すると母は笑って、

「おじいちゃんも寂しいんだよ。おばあちゃんがいなくなってから孫たちまで来なくなっちゃって。」

と言った。私はハッとした。祖母が亡くなったことは、私以上に祖父にとつて大きなショックだったに違いない。しかし私は自分のことしか考えずに祖父のことを避けてしまったのだ。後悔と申し訳なきでいっぱいになった。加えて母は、

「朝ご飯もね、すぐく寂しそうだったよ。いつも凜は忙しそうだなって悲しそうに言ってた。」

と言った。理由は分からないがその時、私は涙が出そうになった。面倒だ、鬱陶しいと感じていた自分がとても恥ずかしかった。なぜきちんと祖父に向き合えなかったのか。幼い頃の祖父母の家で遊んだ記憶が一気に蘇ったような気がした。そして、なぜだか分からないけれど無性に祖父に会いたくなかったのだ。

次の朝、私は祖父に朝食を届けに行った。久しぶりに見た祖父の顔はとても笑顔で嬉しそうに顔をしていた。その日の放課後、私はいつもよりも早めに帰ると祖父の家へ行った。私の顔を見て、やはり嬉しそうに顔をする祖父を見ているとなんだか私も幸せな気持ち

になった。そしてその日は、父と母が帰るまで祖父の家で幸せな時間を過ごした。

この経験から私は、家族の繋がりについて学ぶことができた。毎日ずつと一緒に過ごすというような大きな繋がりでなくても、挨拶や近況報告、電話一本などの小さな繋がりを保つことが大切なのだ。実際に、私も毎日祖父の家に行って遊ぶというのは難しいかもしれない。しかし毎日朝食を届けに行つてコミュニケーションをとることとはできる。自分にできる小さな繋がりを保つことが、相手との関係に深く関わってくるのだと考えるのだ。

人は、誰かと繋がりと安心感を得る。そしてその安心感は幸せへと変わっていくと私は思う。私と祖父と一緒に過ごした時間を幸せだと感じたように。つまり、家族のように大きな安心感を感じる相手とは多くの幸せを感じるのだ。私はその幸せを感じるからこそ、家族の存在意義ではないかと考える。

思春期と呼ばれるこの時期に生きる私たちは、家族や友人など様々な点でぶつかったり避けたりすることも多いかもしれない。けれども私は、そんな中でも人との繋がりを忘れずにこれからも多くの幸せを感じて生きていきたいと思う。そして周りの人にも幸せを返せるような繋がりを持っていたい。

明日からも毎日私は朝食を届け続ける。